

Title	可能なセクストゥスたち：ライプニッツにおける世界の構成原理
Sub Title	Possible sextuses : Leibniz on principles on construction of the world
Author	町田, 一(Machida, Hajime)
Publisher	三田哲學會
Publication year	2006
Jtitle	哲學 No.116 (2006. 3) ,p.57- 72
JaLC DOI	
Abstract	Today it is widely thought that the notion of leibnizian possible world plays a counter-factual model role in the philosophical system of Leibniz. For example, Prof. Hide Ishiguro suggests a possible world branching model based on Lewisian counterpart theory. In this paper I will focus on the problem of interpreting the ontological status of possible worlds. I argue that there is no textual basis for Ishiguro's suggestion. In conclusion, I propose a possible world preceding theory following Theodicy.
Notes	投稿論文
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000116-0057

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

—投稿論文—

可能なセクストゥスたち

——ライプニッツにおける世界の構成原理——

町 田

—*—

Possible Sextuses

—Leibniz on Principles on Construction of the World—

Hajime Machida

Today it is widely thought that the notion of *leibnizian possible world* plays a counter-factual model role in the philosophical system of Leibniz. For example, Prof. Hide Ishiguro suggests a possible world branching model based on Lewisian counterpart theory. In this paper I will focus on the problem of interpreting the ontological status of possible worlds. I argue that there is no textual basis for Ishiguro's suggestion. In conclusion, I propose a possible world preceding theory following *Theodicy*.

* 慶應義塾大学文学部非常勤講師

セクストゥス「なぜ私は王位への希望を棄てねばならないのですか。私が善き王となることは叶わぬことなんでしょうか。」

ユピテル「セクストゥスよ、それはできぬのだ。余は汝が何をなすべきかよく心得ておる。もしローマに赴くことあらば、汝は滅びる。」¹⁾

序

ライプニッツは『弁神論』(1710年)の終わりの部分で、ロレンツォ・ヴァラの自由意志についての対話編の続編を自ら創作している。それは、セクストゥスとユピテルの対話で始まり、その対話にはテオドロスが立会っている。そして、テオドロスはセクストゥスの運命を確認すべく、ユピテルの娘パラスのもとに行く。パラスは「運命の宮殿」において「生じるものののみならず、可能であるものすべての描写」をテオドロスに見せることができると言い、現実世界の創造について次のように語る²⁾。

「父ユピテルは、現実に存在する世界を初めてお作りになる前によく見直され、さまざまな可能性を幾つかの世界にまとめ上げたうえで、その中から最善の世界をお選びになったのです。」³⁾

『弁神論』では、現実世界創造以前に無限に多くの可能世界があり、現実世界はそれら可能世界の中の最善の世界であると述べられている⁴⁾。第2部414節では現実のセクストゥスとは異なった未来を送る「セクストゥスもどき」についての描写がある。彼らは可能世界に帰属する可能な個体であるので、言わば可能なセクストゥスたちである。本稿では、可能なセクストゥスたちの描写はライプニッツにとって現実のセクストゥスへ

の指示を含む反事実的想定に基づいているかどうかが問題とされる。特に、可能なセクストゥスたちの描写は、「本物のセクストゥスとある時までまったく同じ生涯を送った人々がそれ以後異なる人生を送り、異なる事象を体験する」⁵⁾ 描写であると読む石黒ひでの解釈に焦点を絞る。この解釈を便宜的に可能世界分岐モデルと呼ぶことにする。以下では、まず、可能世界分岐モデルを許すテキスト的根拠の有無が考察され、さらに、可能世界の構成原理について、可能世界分岐モデルに伴う困難について論じられる。可能世界分岐モデルでは現実のセクストゥスの反事実的な描写は矛盾律に抵触しない限りにおいて無限に描写可能であるが、しかし、ライプニッツ自身の言う可能世界は矛盾律だけでは構成され得ない存在論的根拠を必要とすると思われからである。確かに、石黒も「可能世界はどれも神の思考にあった」と述べ可能世界が神の思考対象として矛盾律に抵触しない限りにおける実在性を持つと考えている⁶⁾。しかし、可能世界分岐モデルでは、可能世界の構成原理は矛盾律以外に必要なと言わざるを得ない。例えば、「シーザーがルビコン河を渡った」まさにその瞬間に分岐した可能なカエサルが、ある可能世界の月面にいようがどこにいようが何の矛盾もないからである。しかし、本稿の基本骨子を先取りして言えば、可能世界の構成原理には矛盾律のみならず「決定する理由の原理」すなわち充足理由律も必要である、と言える。ライプニッツの可能世界論は、可能世界分岐モデル以上に強い存在論的根拠を必要とすると考えられるからである。つまり、各々の可能世界には矛盾律に加えて（可能世界は「可能」なものである以上当然矛盾律の制限を受ける）それら各々の存在理由が要求される、あるいは、可能世界の個別化という次元での決定原理が必要である、と考えられるのである。結局、問題は、可能世界の存在論的位置づけについて、ライプニッツの言う可能世界と可能世界分岐モデルの間には隔たりがあるということである。言い換えれば、可能世界分岐モデルでは、可能世界はただの可能なものと区別され得ない、ということである。

考察の進め方として、まず、可能世界分岐モデルの妥当性を検討し、次いで、可能世界の構成原理について議論したい。

I

『弁神論』第2部414節では、可能世界の幾つかをテオドロスにパラスが見せるという具体的な場面をライプニッツは創作している。これを次に引用してみよう。

「そこにいるのは、あなたが実際にお会いになったセクストゥスとまったく同じではなく（そんなことはあり得ないことです。[現実の]セクストゥスには、起きるはずのことが常に伴っているからです）、セクストゥスもどきの人々です。この人たちには、本物のセクストゥスについてあなたが既にご存じのことはすべて具わっています。しかし本物の内に既にあることのすべてが具わっているわけではありません。あなたの気が付かないこともあるからです。そしてそれゆえ、彼にとってこれから生ずるであろうことのすべてが具わっているのでもありません。あなたは、ある世界においては、幸福で高潔なセクストゥスを見出すでしょうし、別の世界においては、ほどほどの状態で満足しているセクストゥスを見出すでしょう。これらのセクストゥスは、みな同じくセクストゥスと呼ばれながらも、千差万別なのです。」⁷⁾

このテキストで言及されている「セクストゥスもどき」すなわち可能なセクストゥスたちの描写について、石黒は次のように述べている。

「ここで示される可能世界は、実在するセクストゥスを含まない。それでいながら、実在するセクストゥスについての真理のどれが偶

然的なものに過ぎないかを、神が創造し得た別の世界を見せることによって示すわけである。これらの世界では、セクストゥス、いや、正確に言うならば、本物のセクストゥスとある時までまったく同じ生涯を送った人々がそれ以後異なる人生を送り、異なる事象を体験するのである。」⁸⁾

この読みが可能世界分岐モデルとなる所以は、可能なセクストゥスたちが「本物のセクストゥスとある時までまったく同じ生涯を送った人々がそれ以後異なる人生を送る」というところにある。さて、この読みは次のジレンマと密接な関係がある。ライプニッツによれば、例えば「セクストゥスはルクレチアに暴行した」が現実世界において真なる命題である時、「ルクレチアに暴行した」は「セクストゥス」に含まれるが、その結合は絶対的に必然的なものでない。つまり、その結合の「反対は可能」である。したがって、「セクストゥスはルクレチアに暴行した」の反対は可能である。言い換えれば、「セクストゥスはルクレチアに暴行しなかった」が可能である。一方で、ライプニッツは、現実のセクストゥスはルクレチアに暴行しないわけにはいかないとも言う、つまり「セクストゥスは永遠の昔から悪人でした」というわけである⁹⁾。そこで、このジレンマを解決するために現実のセクストゥスの分身を別の可能世界に立てるわけである。可能なセクストゥスを「現実のセクストゥスの分身」と言い得る根拠は石黒が「シーザーがルビコン河を渡った」の否定の可能性について次のように述べているところにある。

『シーザーがルビコン河を渡った』の否定もまた可能だと言った時にライプニッツが意味しているのは、シーザーに類似した人物が存在し、かつ、この人物がルビコン河を渡らないで、それに引き続くさまざまな結果を経験したかもしれない世界が創造され得ただろ

う、ということである。この人物は、この現実世界の歴史的人物であるシーザーではない。したがって、厳密に言えば、『シーザーがルビコン河を渡らなかった』が真であることはどの可能世界でもあり得ない。」¹⁰⁾

この解釈は現実のシーザーの述語 ϕ と同時に ϕ の否定を同時に成立させるにはこのままでは矛盾するので ϕ の否定を含む主語を「分身」にずらすところに主眼がある¹¹⁾。この可能世界分岐モデルの妥当性について述べる前に断っておくべきことは、石黒も筆者もシーザーの分身を現実のシーザーと「同一の固有名で名指される個体」であるとは考えていない、ということである。現実の個体を名指す固有名は、ライプニッツにおいては原理的にそれ以外の可能な個体を名指し得ないからである。石黒によれば「ライプニッツにとって、現実の人間を指示するのに使われる固有名詞が完全な個体概念を表わすのに対し、可能なアダムや可能なセクストゥスについて語る時『アダム』や『セクストゥス』といった名前は特定の個体を指示せず、したがって完全な個体概念を表わすのではない」言い換えれば可能な個体の名指しは「確定記述の転用」であるということになる¹²⁾。これに加えて筆者に言わせれば、そもそも「現実のセクストゥスと同一の固有名」で「可能なセクストゥス」を名指し得ない。というのも、可能なセクストゥスは「セクストゥス」ではなく「セクストゥスもどき」だからである。可能なセクストゥスの帰属する可能世界は、以下で論じるように、現実世界の創造に先行して（すなわち可能な個体は現実個体への指示を含む反事実想定なのではなく）あらかじめ各々の可能世界が「普遍的秩序」に基づいて構成された存在論的根拠を持つ世界であるので、それら可能なセクストゥスたちは各々が異なる起源を持つと言えるからである。ライプニッツの可能世界論では、可能なセクストゥスたちは複数の世界にまたがって存在しない各々「異なる個体」であるがゆえに、論理的に言えば

(偶然一致した同姓同名という話でないことは言うまでもない) 同一の固有名で名指され得ないのである¹³⁾。

さて、可能世界分岐モデルのテキスト上の根拠についてマーガレット・ウィルソンは手厳しい批判を展開している。すなわち、「本物のセクストゥスとある時までまったく同じ生涯を送った人々がそれ以後異なる人生を送る」と読めるテキスト的根拠がない上に、テキストの深刻な読み間違いをしている、つまり、「ライブニッツが述べているのはこの解釈とまったく逆のこと」である、というのも、「何であれ二つの異なる個体は初めから異なった性質を持つ」からである¹⁴⁾。しかし、ウィルソンは「初めから異なった性質を持つ」ということの意味を明らかにしていない点でこの批判は不十分である。とはいえ、ウィルソンの言うように現実のセクストゥスが可能なセクストゥスに分岐していくと読めるテキスト的根拠は筆者にも見出せない(参考箇所は次節で検討する)。「初めから異なった性質を持つ」という点について詳論する前に、ウィルソンの批判の根拠を見ておきたい。その批判の根拠自体も弱いと思われるからである。

ウィルソンによれば、ライブニッツの言う神もまた個体実体であるので、「神は現実世界を選択した」の反対は可能である。神は他の可能世界を選び得たからである。ところで、石黒解釈では「神は現実世界を選択した」の反対の可能性の意味は、「神は現実世界を選ばなかった」が可能である、すなわち、「可能な神が他の世界を選んだ」ということになる。これは現実世界の選択の瞬間に、神の分身すなわち可能な神を立てることを意味している。現実のセクストゥスが可能なセクストゥスに分岐するのと同じである。「ある時までまったく同じ生涯」を送っているからである。しかし、この解釈は無限に多くの可能世界は唯一の神の観念の中にある、というライブニッツの立場と相容れない。他の可能世界を選び得たのは神の分身ではなく、神自身でなければならない、というわけである¹⁵⁾。

「その反対が可能」な選択肢はその選択を行う同一個体に帰属する、と

いうだけでは、しかしながら、可能なセクストゥスと現実のセクストゥスの関係は不明のままである。しかも、「二つの異なる個体は初めから異なった性質を持つ」ということの意味をウィルソンは明らかにしていない。この意味を明らかにすることこそ、可能世界分岐モデルの困難を示すことに他ならないと思われる。

II

石黒は触れていないが、ライプニッツの言う可能世界があたかも可能世界分岐モデルと解釈できるように読めるテキストがあるのでそれを次に引用してみる。そこではライプニッツは幾何学の比喩を用いて可能世界について次のように述べている。

「ある点を一つに決定するだけの条件がまだ十分でないと、無数の点があることになってしまいますが、それらの点は幾何学者が言う軌跡を描くことになってしまいます。しかしとにかくこれは、点の軌跡（それはしばしば線になりますが）として決定されることになるでしょう。これと同じように、あなたは規則づけられた一連の諸世界を想い描くことができるのです。その諸世界のそれぞれには、問題となる事例が含まれていて、その事例[の違い]に応じてそれぞれの世界の状況や帰結が異なるのです。しかし、もし、現実の世界と異なる場合として、ただ一つの出来事とその帰結だけが異なるように決定された場合を措定してみるなら、それに応じて一つの世界が決定されます。こうしたさまざまな世界はすべてここに、つまり、観念の中にあります。」¹⁶⁾

要点は、幾何学において一点を決定できる条件がそろっておらず、無限に多くの点が指定できる場合、それらの点の一つの軌跡として決定されて

いるが、これと同じ仕方で、唯一の世界を決定する条件がそろっていない場合は、一連の規則付けられた無限に多くの可能世界が想定できる、ということである。また、各々の可能世界にはそれぞれに含まれる事例があらかじめ内包されており、その事例に応じてその可能世界の成り行きは変化する、とも示唆されている。「しかし」以下がポイントである。というのも、現実世界のある一定の条件を変えれば、それにに応じて帰結も変更される可能世界を想定できる、とあるからである。これは可能世界が現実世界の条件の変更とその帰結に応じた可能世界分岐モデルであると解釈できるように一見思われる。

石黒によれば「現実世界と異なる場合として」の可能世界は常に現実世界の反事実的想定である。しかし、石黒は可能世界は「神の思考にあった」と述べることで（可能世界の矛盾律に抵触しない限りでの実在性を認めつつも）可能世界はただの可能なものと同じ（つまり神とともに永遠からあったという意味での）実在性しか有していないと考えている。次節で見るように、可能なものすべてが神の思考対象としての実在性を有することはライプニッツ自身が承認していることであるが、石黒は、ただの可能なものも可能世界も、いずれも可能なものである限りにおいてその実在性という点では違いはない、と考えている¹⁷⁾。確かに、ライプニッツも言うように、例えば、われわれも「罪も不幸もない可能世界」思い描くことができる¹⁸⁾。しかし、ライプニッツが本節冒頭に挙げたテキストで述べているのはそうした可能世界は神の観念の中にあった無限に多くの世界の一つであるということである。言い換えれば、「罪も不幸もない可能世界」はこの現実世界の反事実的想定なのではなく、現実世界の創造以前に先行してあった（もちろん時間的な先行性のことではない）無限に多くの可能世界の一つということである。この点を解明するために、可能世界の構成原理についてさらに考察する必要がある。

III

可能世界の担っている存在論的根拠とは一体何であろうか。石黒によればそれは「思考対象として神の観念の中にあった」ということであり、言い換えれば、現実世界の实在性とはまったく次元の異なる实在性を可能世界は持つ、ということになる。というのも、「明らかに、ライプニッツは現実存在する事物の現実世界と、観念としてのみ存在する可能世界とはまったく違うと信じていたのである」と言われているからである¹⁹⁾。つまり、可能世界を構成する原理は矛盾律以外に必要なものであり、可能世界はただの可能なものに過ぎないのであるから、その構成原理は可能世界を不可能にする矛盾律さえあればよい、ということになる²⁰⁾。ここで、可能世界の「世界」としての存在論的根拠について、次にあげるテキストから手がかりを拾ってみよう。

「諸事物の可能性は、その事物が現実存在していなくても、神の存在の中で基礎づけられた实在性を有している。というのも、もし神が存在しなかったらどんなものも可能でなくなってしまうからである。可能なものは、神の知性の観念の内に永遠に存在している。」²¹⁾

このテキストでは「神の存在の中で基礎づけられた实在性」を可能なものが有すると書かれており、この意味においてのみ石黒は「神の観念の中にあった」可能世界はその实在性を有すると考えている。しかし、このテキストはただの可能な事物について述べているだけである。一方、可能世界は、それら可能な事物の集合である、つまり、ライプニッツの言う可能世界はこのテキストで言われている以上に強い存在論的根拠を有していると考えられる。というのも、各々の可能世界はライプニッツにとって次の

ような仕方で構成される世界だからである。

「神の知恵は、すべての可能なものを包含しそれを精査し、比較し、相互に考量して、完全性もしくは不完全性の程度、強弱、善悪を見積もるが、それだけでは満足しない。それは有限なる結び付きを上回り、無限の結び付きを無限に作る。つまり、各々が無数の被造物を含むような宇宙の可能な系列を無限に作るのである。こうすることによって神の知恵は、それまで個々別々に検討していた可能なものを、無限の宇宙体系の中に分配し、それぞれを比較する。これらすべてを比較し反省したところの結果が、すべての可能な体系の中で最善なるものの選択となり、こうして神の知恵は自らの善意を余すところなく満足させる。以上がまさしく現実の宇宙を作る計画なのである。」²²⁾

可能世界は、ここにおいて、すべての可能なものの無限なる結び付きの無限なる系列であり、さらに、可能世界は神の比較考量によって作られたものつまり被造物とみなされている。ただの可能な事物に内在する実在性に対して、可能世界は神の知恵の中で完全性の程度の比較考量により作り出された被造物として言わば秩序づけられた実在性を持つのである。ただの可能なものが神の被造物であることはない²³⁾。というのも、それらは神とともに永遠からあったものだからである。つまるところ、現実世界が無限に多くの可能世界の一つである、という本稿冒頭に挙げたライプニッツの主張自体にすでに可能世界分岐モデル論駁の根拠が含まれていると言えるのである。ライプニッツは可能世界を現実世界の反事實的想定モデルと措定してはいないからである。これに対して、石黒は次のように述べていることを確認しておく。

「われわれが反事実的主張に合致するような可能世界を記述する時、たとえ「シーザー」という固有名詞を使ったとしても、歴史上の人物であるシーザー自身を記述しているのではない、とライブニッツは考えた。「シーザー」という名前を使って、我々は一つの個体概念を表わし、それから徐々にいくつかの述語を除去し、その否定で置き換えることによって、その個体概念を変えていくのである。だから、この現実世界の個体への指示を含む反事実的想定にもとづいて記述しながら、我々は可能世界について考えているのではあるが、このように記述される可能世界にジュリアス・シーザーその人は含まれていない。」²⁴⁾

この石黒解釈に反対するウィルソンの「異なる二つの個体は初めから異なった性質を持つ」という批判の意味を続けて次節においても考えたい。ポイントは、可能な個体が現実の個体の反事実的想定ではなく、現実の個体自体その創造以前にあった無数の可能な個体の一つに過ぎない、ということである。

IV

『弁神論』第2部416節では、現実のセクストゥスは「永遠の昔から悪人であった」と述べられている。とすると、可能なセクストゥスたちのそれぞれの述語もまた永遠から述語付けられてる、すなわち、「ユピテルに服従する」「トラキアに赴く」「敬愛されている」を述語として持つ各々可能なセクストゥスたちもまた永遠からそうであった、とライブニッツは言はねばならないと思われる。その根拠は次の通りである。

可能なセクストゥスたちの描写は『弁神論』第2部414節に続いて415節においても見られる。そこでは、無限に多くの可能世界について記された「運命の書」をテオドロスがひも解くというかたちで、可能なセク

ストゥスたちのさまざまな行為が記述されている。別の世界には別の一人のセクストゥスが属しているのである。

また、『弁神論』第1部9節においてライプニッツは「この世界にもし罪も苦悩もなければより善なる世界になるか」という問題に対して、そうはならない、と答えている。その理由は「諸可能世界のいずれにおいてもすべてのことが関係づけられている」からである。「宇宙は、いかなるものであれ、あたかも大洋のように、全体で一つの作品」なのであり、現実世界に生じる最小の悪でさえ、もしそれが欠落したなら、もはやこの世界にはならない、と述べている。この主張は現実世界創造に先行するすべての可能世界にも適用されねばならない。「諸可能世界のいずれにおいても」その世界に必要な不可欠なことがもし欠けていたのなら、その世界ではなくなるからである。そして、すでに見たように第2部225節では、「現実の宇宙創造計画」が描写されており、現実世界の決定に言わば先行して可能世界のすべてについての決定が説明されている。言い換えれば、「決定する理由の原理」すなわち充足理由律がすべての可能世界の存在理由に不可欠である、ということになる。とすると、可能な個体も現実の個体への指示を含む反事実的想定として立てられたものでないと言い得る。というのも、可能世界を立てること自体が現実世界の反事実想定ではないことになるからである。

「さまざまな可能な個体は、さまざまな可能な秩序つまり可能なものの系列に内属している。そして、何であれ可能な個体の系列は、可能な個体に入り込む種の観念に依存しているだけでなく、ある自由な決定にも依存している。その決定によって系列の（調和ないし）基礎的秩序言わば諸法則が確立されるのである」²⁵⁾

ここでは「自由な決定」つまり「決定する理由の原理」に基づいて可能

な個体の内属する系列すなわち可能世界の秩序が決定されると述べられている。「自由な決定」が可能な個体に及ぶ点については、1686年7月14日のアルノーへの手紙でも「可能と考えられる神の自由決定」は「可能なアダムの概念にも入っている」とライプニッツは書いていることから分かる。それゆえにライプニッツは「これらの決定が現実のものとなった場合は、それは現実アダムの原因となる」と言えるのである²⁶⁾。つまり、可能な個体への「自由な決定」の関与は、まさに各々の可能世界の内実の決定に通抵しているのである。その決定によって「系列の基礎的秩序言わば諸法則が確立される」からである。同じ手紙において次のように述べられている。

「私の考えでは、神の立てることができたさまざまな計算にしたがって世界を創造する仕方は無限にある。その各々の可能世界は、その世界固有の、神のある主要な計画もしくは目的に依存している。換言すれば（可能性の見地から考えられた）ある原始的な自由決定、すなわち、その可能な宇宙の普遍的秩序の法則に依存している。この法則はその宇宙に当てはまりその宇宙の概念を決定するとともに、その同じ宇宙には入り込むはずのあらゆる個体実体の概念を決定する。」²⁷⁾

さらに、『弁神論』第2部189節では、「永遠真理の領域にはあらゆる可能なものがあり、それゆえ規則的なものも不規則的なものもある」が「秩序や規則性をよしとした理由があったはず」でありその理由は神の知性の内にのみ見出されると書かれている。あらゆる可能世界にはその世界に応じた「普遍的秩序」が決定されているがゆえにそこに帰属する可能な個体概念もその「普遍的秩序」に従ってあらかじめ、すなわち、現実世界の創造に先行してその存在理由が決定されているのである。こうして、

可能世界の構成原理は矛盾律だけではなく、その各々の可能世界が「世界」たり得る「普遍的秩序」を決定する「決定する理由の原理」も必要であり、それによって各々の可能世界がなぜ神の観念の中にあったのかその理由づけがなされると言える。可能世界はただの可能なもの以上の実在性すなわち「普遍的秩序」を有しているからである。

要約しよう。ライプニッツの可能世界論は可能世界分岐モデルでは説明できず、そのモデルの解釈を許すテキスト的根拠もない。また「決定する理由の原理」はすべての可能世界に存在理由を与えるため、可能世界の構成原理は矛盾律に加えて「決定する理由の原理」が必要となる。矛盾律に加えて「決定する理由の原理」を可能世界の構成原理と認めることは可能世界の存在論的根拠という点でも可能世界分岐モデルを論駁することになる。可能世界分岐モデルの構成原理は矛盾律のみが必要とされるのに対して、ライプニッツの言う可能世界は、ただの可能なものではなく「普遍的秩序を持つ」神の被造物だからである。さらに、可能世界分岐モデルにおいては現実世界の反事實的想定である以上現実世界から分岐していく可能世界はもはや「存在を要求する」ことはない（現実世界が存在している以上それら各々の可能世界はもはや存在を要求し得ない）。言い換えれば、ライプニッツの言う可能世界はそのいずれもが等しい権利でもって現実世界になり得た（存在し得た）ということからみてもそのモデルには困難が伴う。結局、可能世界分岐モデルは「すべての可能なものが存在を要求する」というライプニッツのテーゼと根本的に相容れないと言わざるを得ない。すなわち、現実世界の創造の後にさらにこれとは異なる可能世界が「存在を要求する」というのはライプニッツの論理では背理と思われる。というのも、存在する世界は唯一しかあり得ないからである。

註

- 1) 『弁神論』第2部413節。以下『弁神論』（部と節のみ記載する）の訳語はすべて佐々木能章訳『ライプニッツ著作集第6-7巻宗教哲学』，工作舎，1990，に依拠する。
- 2) 『弁神論』第2部414節。
- 3) 同上。
- 4) 『弁神論』第1部8節，42節，52節。
- 5) 石黒ひで，『ライプニッツの哲学増補改訂版』，岩波書店，2003，p. 209。
- 6) 同上，p. 207。
- 7) 『弁神論』第2部414節。[] は訳者による挿入。
- 8) 石黒，前掲，p. 209。
- 9) 『弁神論』第2部416節。
- 10) 石黒，前掲，p. 207。
- 11) 分身説のオリジナルはデヴィッド・ルウィスである。註14参照。
- 12) 石黒，前掲，p. 237。
- 13) 念を押して言えば，石黒解釈においても可能な個体と現実の個体は「同一の固有名で名指される」ことはないのである。
- 14) M. Wilson, 'Possible Gods', in *Ideas and Mechanism*, Princeton, 1999, p. 408.
- 15) *ibid.*
- 16) 『弁神論』第2部414節。[] は訳者による挿入。
- 17) この論点は石黒氏に確認したことである。註20参照。
- 18) 『弁神論』第1部10節。
- 19) 石黒，前掲，p. 226。
- 20) この論点も石黒氏と数回に渡って議論した機会に筆者が確認したことである。忙しいおり貴重な時間を割いて頂いた氏に感謝いたします。
- 21) 『神の大義』8節，佐々木能章訳『ライプニッツ著作集第7巻』前掲所収。
- 22) 『弁神論』第2部225節。
- 23) 『弁神論』第2部335節。
- 24) 石黒，前掲，p. 208。
- 25) G. Grua, ed., *G. W. Leibniz: Textes Inédits*, I, Paris, 1948, pp. 311-312.
- 26) C. I. Gerhardt, ed., *Die Philosophischen Schriften von G. W. Leibniz*, II, Hildesheim, 1965, p. 51.
- 27) *ibid.*